

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 7 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520192

研究課題名(和文) デジタル環境下の映像作品における可視性に関する調査研究

研究課題名(英文) Research on the question of visibility of visual image works under the digital environment

研究代表者

北野 圭介 (KITANO, Keisuke)

立命館大学・映像学部・教授

研究者番号：60303096

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)： デジタル環境下の映像作品における可視性に関する調査研究である本プロジェクトにおいては、文献資料と映像資料の調査、また、映像を用いた芸術作品を中心にした実地調査を通して、デジタル映像が可視的なものと可視的でないものの腑分けを、その物質的組成においてどのように組成しているかについて一定程度の理論的な整理をおこなうことができた。

具体的には、欧米で活性化しつつある新しい唯物論やイメージ人類学といった思想的動向の整理をおこない、それらが、どのように映像を用いた芸術作品が分析できるのかについて方法論を考察した。また、それらが、日本における映像文化にいかなる仕方に応用できるのかについて分析をおこなった。

研究成果の概要(英文)： This research project, which is to investigate the ways in which visibility is realized in visual image works of art under the environment provided by digital technology, is conducted to explore the question of the distribution of the invisible and the invisible in works of art using digital images in particular in terms of their constitution of material conditions.

It is done through research on literature on related topics, in particular on theorizations of visual images in new materialism and anthropology, and through research on works of art on the site survey base. This project also seeks to apply what it has gained through those theorizations onto works of art using digital image produced in Japan.

研究分野：映像理論

キーワード：映像 デジタル技術 メディア 芸術 哲学

1. 研究開始当初の背景

本プロジェクトは、これまでに蓄積された、次のような研究背景(ニュー・メディア研究の言説分析、メディア・アートの実地調査、映画史・視覚文化史)のもと、組み立てられたものである。

欧米のニューメディア研究の理論的検証

メディア・アートの実地調査

視覚文化の系譜学的研究

デジタル環境下における映像現の可視性の研究

具体的な経緯を示せば、以下のようなものになる。

映像をめぐる新しい事態に対して、欧米各国では、新しい研究領域が開拓され大きな成果をあげつつある。それは、1990年代に「ニュー・メディア(New Media)」研究(欧州では「Science of Image」と呼称されることもある)という領域として立ち現れ、哲学、芸術学、認知科学、心理学、社会学、情報科学、メディア論などの分野を巻き込み目覚ましい成果をあげつつ展開している。それは、1980年代に盛んであった技術論や未来社会論といった方向ではなく、デジタル技術を通しての文化全般がどのような変容を蒙りつつあるのかということに問うもので、メディアと人間存在(そして社会)との関係をより根本的なレベルから考察し直そうとするものだといえるもので、オーストリアのリンツで開催されている芸術祭「アルス・エレクトロニカ」やアメリカにおける同じくデジタル技術のフェスティバル「シーグラフ」などで実践面においても探求と呼応するものでもある。申請者はまず、こうした学術研究そして芸術実践の双方で産出されている新しい知の成果について、日本での摂取が限定的な範囲にとどまっていたことを鑑み、論文「ニュー・メディア、オールド・メディア」(『アメリカ研究』、アメリカ学会、第39号、2005年、pp.63~83)でそのサーヴェイをおこない、さらには、2009-2011年度科学研究費基盤研究(C)「デジタル技術導入以後の映像表現に関する欧米における理論的言説の調査分析」においては具体的な調査研究をすすめて、成果の一部としてニュー・メディア研究を理論面から整理する著作『映像論序説 デジタル/アナログを越えて』(人文書院、2009年)を発表した。口頭発表としても国際会議(Creative Industry Conference, Germany, 2007やCairo International Festival of Experimental Theatre, Egypt, 2008)に出席、また山口情報芸術センターが催した舞踏家・振付家白井剛による舞踏のデジタル映像化プロジェクトに研究者としての参加もおこなった。これらの活動により研究者の国内外のネットワークの構築もすすめた。

他方、申請者は、デジタル映像技術が科学映像や都市計画を中心としてさまざまな領域で近年活発に研究開発がすすめられている点に注目した研究プロジェクトへの参加もおこない(2010-12年度科学研究費基盤研究(B)「科学映像を中心としたデジタル映像の展示モデルの構築に関する比較文化的調査研究」研究代表者:大森康宏)、ヴィジュアルイゼーションの事例に関する理論的また実地調査をすすめてきてもいる。

こうした理論的研究と事例調査のなかで、デジタル環境下における映像表現が可視性そのものの様態を変容させつつあるという本プロジェクトの構想は構想されてきたといえる。

また、デジタル技術による新しい映像表現の測定は、現代の事例の理論的解釈だけでは十分ではなく、映画や絵画などの視覚文化の長い伝統のなかで検討することも不可欠である。申請者はこれまで、映画研究をはじめとする複数の研究プロジェクトをおこなっており、著作『ハリウッド100年史講義』(平凡社新書、2001年)において欧米の現代映画研究の日本で最初といえる整理と紹介をおこなっている。

さらにいえば、実のところ、欧米においては、映画をはじめとするアナログ映像の研究は、デジタル映像の出現を受け逆照射的な比較検証が可能となったこともあって、近年従来とは異なる視点からの探求もすすんでいる。すなわち、(記号論的映画研究の後)改めて、映画の画面とは観る者にとってどのような存在であったのか、あるいはどのような現象形態をもつものであったのかという研究へと移行しつつあるし、加えていうならば、19世紀(あるいはそれ以前)の視覚経験との映画の映像の連続性と断続性に関する研究も含め、美術史、演劇史、写真史、哲学史、心理学史を巻き込みながら多角的な方向で展開されつつある(このような観点から、マス・メディアを主たる対象としていた旧来のメディア研究が、デジタル革命以降も視野に収め再編成されはじめている)。申請者は、こうした問題にも取り組み、その成果は先述の『映像論序説』でもとりあげているし、表象文化論学会などで口頭発表もおこなっている。

以上のような背景を踏まえ、現時点での到達点として、一種の中間報告として、媒体の力を固定化された固有の表現力ではなく複数の特性を混在させるものとして位置づけ直す問題提起をおこなう論文「トランス・メディア・エステティック」、『思想』4月号所収、岩波書店、2011年)を発表している。これは、視覚文化史を踏まえた歴史分析の視角も組み込みながら、映像の可視性の多様化を生んでいる点を踏まえた本プロジェクトの立論にもつながるものである。

本プロジェクトのこうした立論に対しては、認知心理学や脳生理学またVR技術研究も

視野に収めた文献調査が必要であるが、申請者は、新潟大学を中心とした脳生理学者および認知心理学者との映像に関する研究会に参加した経緯もあり、また、本務校の研究推進施策を受け、フランスのラヴァルにあるVR研究のクラスター（Ingenierium、CLARTE、ENSAM+、Technopole）を訪問し、映像展示に活用される科学技術の現状について担当者と共同研究の可能性を含め実地調査をおこなっている。

2. 研究の目的

映像文化は、デジタル技術の急速な発達とともにその存在様態を大きく変貌させ、ますます多岐化し日常生活に浸透しつつあるが、近年、3D映像技術やさまざまなヴィジュアルリゼーションの試みのなかで、その可視性についての諸課題を浮上させつつある。これを受け、新しい映像の様態を、可視性の多彩な形態に関して主として理論的言説を中心にしながら、実地調査もあわせおこなうものである。

なお、本プロジェクトは、下に記すような一定の成果をあげたといえる2009-2011年度科学研究費基盤研究（C）「デジタル技術導入以後の映像表現に関する欧米における理論的言説の調査分析」を展開させ設計されたものである。

3. 研究の方法

本プロジェクトは、学術文献を中心とした言説分析などの調査研究と、映像を用いた作品を視察する実地調査開発研究より成る。

文献調査研究は、1)国内、海外における研究の動向の調査（文献資料の収集および研究者への直接のインタビューを含む）、2)文献資料の整理と精査、3)レビューの三つの方向からなされる予定である。

作品視察研究は、1)国内、海外における作品の視察（制作者への直接の聞き取りを含む）、2)視察の記録と精査、3)レビューの三つの方向からなされる予定である。

4. 研究成果

平成24年度は、以下のとおりである。

主として、ロンドン大学ゴールドスミスカレッジにおいて、欧州の現代映像理論について調査と研究にあたった。とりわけ、ドイツ語圏においてすすむハンス・ベルトウングらの「イメージ人類学」及びジークフリート・ツェリンスキーらの「メディアの考古学」を中心とした英語圏における受容を調査した。これらの諸理論が、いわゆる構造主義・ポスト構造主義に典型化されるような記号学的方法論を応用した映像分析のフォーマットの限界を指し示すものであることを確認した。とともに、身体や情動といったこれまでの映像研究では重要視されてこなかった側面についてもアプローチできる点についても検討することができた。

他方、これらの諸理論により考察可能な芸術作品の調査を行った。また、これらの諸理論を、日本における映像文化、とりわけ日本映画についてどのように適用しうるかについても可能性を探った。

平成25年度は、以下のとおりである。

まず、デジタル技術関連の映像の様態についての文献調査をおこなった。とくに、暴力を中心に身体に関わるイメージをめぐる関連する理論的文献を調査し、その成果は、2014年3月末に刊行した『制御と社会』（人文書院）において発表した。

また、現代美術論における映像メディアに理論的課題について、文献資料調査と視察調査をすすめ、成果は、表象文化論学会の機関誌「表象」に掲載された、共同討議「ポストミディウム映像をめぐる」に参加した。

平成26年度は、以下のとおりである。

まず、近年欧米諸国において活性化しつつある、文化研究における物質的なものの理論的定に関わる新しい唯物論に関わる調査をおこなった。また、そうした新しい唯物論を映像メディアにおける表象への関わりについて文献資料の調査をおこなった。

前者については、名古屋大学の「アジアのなかの日本」文化センターでの研究会（2014年12月8日）において成果の一部を発表した。また、後者については、その一部を、表象文化論学会研究集会（2014年11月8日）に主として写真映像をめぐる物質性に関する試論を成果の一部として発表した。このペーパーはまた、2014年3月に開幕した京都国際現代芸術祭の公式カタログにおいて日英の両言語で発表された。

平成27年度は、以下のとおりである。

これまでに収集した文献資料や映像資料の整理と検討、また芸術作品の実地視察についても整理と検討をおこなった。また、欧米だけでなく、日本を含めたアジア諸国の映像文化を視野に収めるパースペクティブの可能性についても理論的検討をおこなった。

成果の一部は、文字媒体での発表として、新しい唯物論とメディア研究について、対談の形式において、アレクサンダー・ザルテン（ハーバード大学）と「兆候としてのモノ」を、また檜垣立哉（大阪大学）と「ポスト現代思想としての京都学派」を、「雑誌「現代思想」において、それぞれ2015年6月号と2016年1月号において発表した。また、2015年6月6日には、ロンドン大学バークベックカレッジにおいて口頭発表、2015年11月12月に台湾交通大学において招聘講演、さらに、2016年2月23日、南カリフォルニア大学において招聘講演をおこなった。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 件）

〔学会発表〕(計6件)

Keisuke Kitano、”The Engine of Animated Background, CJRC Lecture Series、2016年2月23日、南カリフォルニア大学、ロサンゼルス(アメリカ)

Keisuke Kitano、“The Ontological Status of Visual Representation in Japan in the Age of Digitalization: A Case Study of Media Practices in Japan”、conference *Visual Culture and Social Mediation in East Asia*、2015年11月12日、国立交通大学、新竹市(中華民国)

Keisuke Kitano、“Animated Body: the Logic of Trans-media Aesthetics in Japan”、conference *Life Remade: The Politics and Aesthetics of Animation, Simulation and Rendering*、2015年6月6日、the Birkbeck Centre for Media, Culture and Creative Practice・ロンドン(イギリス)

Keisuke Kitano、“Kobayashi Hideo and the Question of media”、conference *Media Theories in Japan*、2013年11月15日、Department of East Asian Studies, Harvard University、ケンブリッジ(USA)

Keisuke Kitano、“The Logic of the De-cinematic, or Origins of the Japanese cinema: from magic lanterns through 60s Avant-garde to animation,”、the Birkbeck Centre for Media, Culture and Creative Practice and the London Asia Pacific Cultural Studies Forum、2013年4月30日、ロンドン(イギリス)

Keisuke Kitano、“The Logic of the De-cinematic, or Origins of the Japanese cinema: from magic lanterns through 60s Avant-garde to animation,”、イメージ人類学研究会、2013年3月6日、ロンドン大学ゴールドスミスカレッジ、ロンドン(イギリス)

〔図書〕(計1件)

北野 圭介、人文書院、『制御と社会 欲望と権力のテクノロジー』、2014、368

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

北野 圭介、「イメージのマテリアリティとサーキュレーション」、京都国際現代芸術祭 PARASOPHIA 公式カタログ、2015、153-155頁、165-167頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

北野 圭介(KITANO, Keisuke)
立命館大学・映像学部・教授
研究者番号：60303096

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：